



# たすけ一条のひながたを



10月26日秋季大祭で真柱様が諭達をご発布くださった

# 真 朋

発行所  
天理教芦津大教会  
〒546-0003  
大阪市東住吉区  
今川8丁目6番32号  
電話 06 (6702) 1980  
FAX 06 (6700) 1854  
Eメール shinmei@ashitsu.or.jp  
印刷所 天理時報社

立教186年1月24日

## 本部巡教

本部員 深谷善太郎先生

立教185年秋季大祭で、真柱様は教祖百四十年祭活動に取り組む指針となる「諭達第四号」をご発布くださいました。この中で、「教祖年祭への三年千日は、ひながたを目標に教えを実践し、たすけ一条の歩みを活発に推し進めるときである」と仰せくださいます。教祖は定命を縮めてまでも世界たすけのためのおつとめを急き込まれ、お姿をお隠しになってからは、身上了たすけのためのおさづけの理を広くお渡しくださるようになりました。年祭の元一日を振り返るとき、教祖のお望みは何よりも、私たちが「つとめとさづけ」によっておたすけに勇む姿ではないでしょうか。

年祭活動の三年千日は、教祖のひながたに照らして自らの心遣いや行動を見つめ直し、成人に励むと同時に、外に向けて積極的に働きかける旬でもあります。この3年間、思うようににをいがけ・おたすけができなかったことを思うとき、諭達のご発布こそ、私たちが人だすけに動き始めるための、親神様からの掛け声ではないでしょうか。「つとめとさづけ」を芯に、たすけ一条のひながたを歩む私たちの姿を教祖にご覧いただきましょう。

## 正面方加

毛利元就は、厳島の戦いで2万の大軍を数千の軍勢で破ったが、将兵に3日分の糧食しか持たせなかった人間は期間が区切られてこそ頑張れる。

元就はそれを応用した。コロナ禍においても、政府は時々期限を区切り、緊急事態宣言やまん延防止対策などを示した。期限を区切らなければ、どこまで続くのかと見えぬゴールに疲労困憊し、戦う勇気さえも失ってしまっただろう。

諭達をご発布いただき、来年から教祖百四十年祭に向かつての年祭活動が「三年千日」と仕切ってスタートする。どうしても一つ、仕切り根性、仕切り力、仕切り知恵、仕切りの道、どうしてもこうでも踏まなきゃならん。

明治40年5月8日  
どうしたら教祖にお喜びいただけるのかと思案し、工夫し、心を定めて実行する毎日、期限を区切って通るからこそ、私たちの成人は進んでいく。

(道)

《秋季大祭 神殿講話》

## 教祖百四十年祭へ

### つとめとさづけを心に実動を

大教会長 井筒梅夫

皆様方には日々は時旬の上にお励みくださり、殊に今日の大祭を仕切って真実のご丹精を下さいます。誠にありがとうございます。

また只今は、秋の大祭を滞りなく、心勇んで勤めさせていただきましたことは、大変有り難い次第です。今月26日、真柱様が論達をご発布くださいます。この論達の精神に全教が一手一つに心結んで、来年から年祭活動が始まるわけですから、そこで今日は、教祖の年祭を勤める意義について、思案しますところをお話ししたいと思います。

#### 年祭の元一日

人間の年祭は、縁ある人々が集

まってその生前を偲ぶものであります。また、教祖の年祭はそれとは異なります。

子供可愛い故、をやの命を二十五年先の命を縮めて、今からたすけするのやで。

明治20年2月18日

とのお言葉通り、世界中の可愛い子供たちをたすけるために、25年先の命を縮めて現身を隠された教祖の親心にお応えさせていただくのが教祖の年祭です。

ただ、教祖が現身を隠されてから140年近くの年限が経っているわけですから、先人に比べて実感が湧きにくいことは否めませんし、年祭の捉え方や思いの持ち方も、

時代とともに変わってきているように感じます。

しかし、いくら時代が変わっても、教祖の年祭を勤める意義は変わらないのです。まずは、教祖の年祭の元一日に思いを致すことが、教祖の年祭を勤めるためのスタートラインだと思います。そうした上から、今日の講話では、明治20年陰暦正月26日の教祖が現身を隠された元一日と、そこにこもる教祖の親心について思案したいと思います。

教祖年祭の元一日については、

『稿本天理教教祖伝』第十章「屏ひらいて」にその詳細が記されていますので、皆さんもこれを改めて熟読してください。ここには明治20年1月1日（陰暦12月8日）から、教祖が現身をお隠しになられた2月18日（陰暦正月26日）の、

主として教祖と初代真柱様との間で交わされる、49日間の神と人との問答が書かれているわけです。

教祖は、御自身の身上を台とし

て、終始おつとめの実行を促され、人間思案を神一条の考え方に正すことをお急ぎ込みになられます。

しかし、初代真柱様をはじめ周囲の方々は、教祖の御身を思つて踏み切ることができません。殊に初代真柱様の、思召と法律との板挟みになられた苦悩と葛藤は、並大抵なものではありませんでした。

そうした中、教祖は厳しくも親心溢れるお仕込みをなされて、その教祖の導きによって、人々は人間思案から脱却して、神一条の心定めをされるまでになります。

このような状況の中で、陰暦正月26日を迎えるのです。

つまり、この49日間は、立教以来にわたるひながたの道の総仕上げともいべき、教祖の最後のお仕込みです。

#### 思召と法律との狭間で

教祖年祭の元一日を思案するにあたっては、その前提となる大切な事柄が2つあります。1つは、教祖はなぜそこまでおつとめの実



行を急ぎ込まれたのか。もう1つは、初代真柱様や周囲の方々は、なぜおつとめを勤めることをそこまで躊躇(ちゅうちよ)されたのか、という2つです。

教祖はなぜそこまでしておつとめを急ぎ込まれたのでしょうか。それは、おふでさきに、

このつとめなのに事やとをもっている  
せかいをさめてたすけばかりを

四号 93

と教えられるように、おつとめは親神様の可愛い子供である世界中の人間を余すことなくたすけ上げたいとの思召を実現するためのた

すけの元だてであり、世界たすけの根本だからです。つまり、おつとめを勤めなければ、他のところでどれだけ頑張っても、陽気ぐらしは実現しない。おつとめはそれほどのものであり、おつとめこそ天理教の信仰の生命線です。

「つとめ一ちよてみなたすかるで」(十号 20)「つとめするならせかいをさまる」(十四号 92)という御守護によって、陽気ぐらしへ導いていただく。このおつとめの完成なくして、たすけ一条の道は成り立たず、陽気ぐらしの御守護は頂けない。だからこそ教祖は、おつとめの実行をお急ぎ込みくたさったのです。

おつとめの大切さは先人たちが十分に理解していました。しかし、なぜそこまでおつとめの実行を躊躇されたのでしょうか。それは、教祖の警察や監獄への拘留に繋(つな)がるからです。

教祖の最後の御苦勞は、明治19年2月19日から12日間、現身をお隠し遊ばされるちょうど1年前、

教祖御歳89歳のときです。この年は、大阪管区气象台に残っている

記録によると、この12日間は最低気温が零下であり、殊に初代真柱様と共に徹夜で取り調べを受けられた2月18日は、最低気温マイナス10・5℃でした。その厳しい寒さの中、教祖には寝具は一切渡されず、夜は冷たい板の間で、御自身の綿入れを掛け布団の代わりにされ、草履に帯を巻きつけて枕の代わりにして、お休みになられました。昼間は道路に沿った板の間の巡查の横に座らされ、道行く人への見せしめにされました。時には巡查が井戸端で水をかけようとしたが、付き添っておられた孫のおひさ様が全力で防がれました。

この12日間が、教祖の御身にどれほどこたえたか、察するに余りあるのです。

この事実を知る者が、どうしておつとめにかかれましようか。初代真柱様や先人方がおつとめを躊躇なさったのは、教祖の身を案じ

る心、親を思う心からのことです。

## つとめの実行へ

教祖伝第十章の最初に、明治20年正月の日の夕方、ふとよめかれた教祖は、

「これは、世界の動くしるしや。」

303頁

と仰せになった、とあります。何か大きな出来事を予見するようなお言葉です。

すると1月4日になって、教祖の御身上が迫ってきました。そこで飯降伊蔵先生を通して親神様の思召を伺うと、現代語に訳せば、「お前たちは親の言葉を腹の底から聞いていない。このことが親にとつては実に残念である。皆の者の成人があまりにも鈍く、聞き分けがつかないようなら、親はもうこのまま息を引き取ってしまうかもわからんぞ」と仰せになって、教祖の御身体が急に冷たくなった。これに驚いた一同は、おつとめを手控えていたのが間違いであったと気付いて、翌5日から連日お詫



びのおつとめを勤めて、教祖の身上平癒を願われました。

しかし、このときのおつとめは、警察の取り締まりをはばかり、夜中に門を閉めてひっそり勤めるといったもので、教祖の思召に十分応えるものではありません。教祖はいくらか持ち直されたものの、依然何も召し上がらないような状態であられました。

それ以降、教祖の御容態が一進一退を繰り返す中、人々はその都度御神意を尋ね、談じ合いを重ねながら、教え通りのつとめの実行へと心を練り上げられていくのです。

### 情を超えた親心

あるとき、周囲の方々が相談した上で、「おつとめを勤めさせていただきますしよう」と初代真柱様に進言をしました。しかし初代真柱様は「いづれ考えの上で」と即答なさいません。

それもそのはずです。初代真柱様は中山家にご養子に入られてか

ら教祖とずっと生活を共にされ、教祖の御様子もお屋敷を取り巻く状況も、一番知っておられます。警察の従来からの弾圧ぶり、教祖の御容態を考えると、即答などできるはずがありません。

初代真柱様の親を思う心、親孝心という点では100点満点です。しかしながら、親神様の親心は、時として人間の情の世界を遥かに超えたところにあります。私たち人間の親にしてみても、子供のことを真剣に思うが故に、時には厳しい道を歩ませることがありますが、子供が苦心をし、苦勞する姿に親は陰で涙するのです。これが親心です。

教祖は、初代真柱様の親を思う心を痛いほど分かっておられたのです。分かってはおられるけれども、その上でのおつとめの急き込みです。

私はここに、「どんなことをしても神一条の道を歩ませてやりたい」との、教祖の何とも言えない切ないほどの親心を拝するのです。

初代真柱様も、おつとめの実行を促される教祖の御心は十分にご承知です。その教祖の思召と人間の考え方の狭間で、思案に思案を重ねられたのです。そして熟慮の末、いよいよ教祖にお伺いすることになりました。

初代真柱様には、おつとめを勤める上での苦勞と心配がありました。苦勞とは、教祖の思召と法律との板挟みになっていることです。法律に逆らえば弾圧は厳しくなつて、教祖の監獄への御苦勞に繋がります。

そこで初代真柱様は教祖に、「人間は法律に逆らうことはかないません」とお尋ねされると、これに對して教祖は、

さあ／＼月日がありてこの世界あり、世界ありてそれ／＼あり、それ／＼ありて身の内あり、身の内ありて律あり、律ありても心定めが第一やで。

明治20年1月13日

と噛んで含めるようにお諭しになりました。親神様があつて、親神

様が創られたこの世界がある。世界ができてそこに国々があり、その国に暮らす人々がいる。そしてその人々がつくったのが法律である。これが今の世界が成り立っている順序であり、この法律を活用するのは人の心だ。その心を親神様の思召に沿って神一条に心を定めるのが一番大切なことである、と教えられました。

次に心配は、教祖の御容態です。そこで初代真柱様は、「今聞かせていただいた根本の順序はよくわかりましたが、教祖の御身上が心配でなりません。さあという差し迫ったときには踏ん張ってくださいましうか」とお伺いされたところ、

さあ／＼実があれば実があるで。実と言えは知るまい。真実というは火、水、風。 同前

と、人に真実の心があれば、親神の火水風の御守護があると、いよいよというときは親神様が引き受けると、鮮やかなお言葉がありました。それでもなお心配される初

代真柱様の押しての願いに、

さあ／＼実を買うのやで。価を以て実を買うのやで。 同前

と、真実をもつて買うならば、真実の守護を与えてやろうと、親神様の自由自在の御守護を頂くには皆が真心を尽くして事に当たることが肝心であることを教えられました。

このように、難しい事情の中でこそ神一条、つとめ一条の心が定まるのだ、ということをお仕込みになったのです。

### 扉ひらいて

このお言葉を受けて、1月18日から教祖が現身を隠される前日の2月17日（陰暦正月25日）にかけて、連日夜におつとめを勤めることになられます。人々は寒中、夜遅くに水ごりを取って、教祖の身上平癒を祈願しておつとめを勤められました。この間、教祖は御身上を持ち直されて、下駄を履いて庭を元気に歩かれるまでになりました。

ところが御姿お隠しの前日の夜、教祖の御身上が急に迫る状態になり、正月26日を迎えることになりました。

26日は、お屋敷では毎月のおつとめの日であり、もちろん警察が目光らせ、取り締まりを強化しています。もしこの日、白昼堂々とおつとめを勤めることで、御身上よろしくない教祖の御身に手がかかれば、取り返しが付かない事態になるわけです。初代真柱様や主立つ人々は、この板挟みの中に立って思案に暮れました。

そこでまた飯降伊蔵先生を通して思召を伺うと、「このことは今まで繰り返し論じてきた。悠長なことを言っている場合ではない。今と言ったら今すぐにかかれ」と厳しいお言葉がありました。そしてその日の正午頃から教祖の御容態が急変されたのです。

ここにきて一同の腹は決まりました。初代真柱様の「おつとめの時、若し警察よりいかなる干渉あっても、命捨て、もとという心の

者のみ、おつとめせよ。」との固い決心に、一同も意を決しておつとめにかかれたのです。当日は数千人の参拝者があつて、結果にしていた竹が粉々に割れるほどの状況にあつたにもかかわらず、奇跡的に巡査は一人も来ず、無事におつとめは勤められたのです。

しかし、これと立て合つて、教祖は十二下りの最後のおうたの終わる頃、現身をお隠し遊ばされました。おつとめを勤め終えた人々はこれを聞いて打ち驚き、悲壮な声をあげて泣きました。立っている大地が砕け、月日の光が消えて、この世が真っ暗になったように感じたほど驚愕し、落胆したのです。しかし、これではならじと氣を取り直して、飯降伊蔵先生を通しておさしづを伺うと、

神が扉開いて出たから、子供可愛い故、をやの命を二十五年先の命を縮めて、今からたすけするのやで。しっかり見て居よ。

明治20年2月18日  
とのお言葉がありました。

この時の人々の様子について教祖伝には、

「姿をかくして後までも、生きて働かれると聞き、成程、左様であるか、教祖は、姿をかくして後までも、一列たすけのために、存命のままお働き下さるのか、それならば、と、一同の人々は漸く安堵の胸を撫で下ろした。」

335頁

と記されています。事実、このおさしづをいただいた先人方は我に返つて、その思召を誠にするべく存命の教祖の指導きの元、広くお渡しくださることになったおさづけの理を戴いて、おたすけに、布教に奔走されたところ、道は破竹の勢いで伸展していったのです。

### 究極の親心

ここで、元一日における教祖のお心に改めて思案をしてみたいと思います。現身を隠される直前のおつとめの最中に、「陽気な鳴物の音を満足気に聞いておられた」とありますが、教祖は何に満足なさ

ったのでしょうか。

この時のおつとめは、かぐらづとめは女性が一人だけで、てをどりは全員男性でした。鳴り物は琴と三味線と小鼓の3つだけですから、おつとめとしては不完全なものでした。それでも満足をされたということは、おつとめそのものだけでなく、命捨ててもという覚悟を決めた心定めをお喜びになった。「心定めが第一やで」とお諭しくださったように、この心定めをお喜びになったのです。人間思案を捨て去り、お急き込みくださるおつとめを実行する決心をされた。命捨ててもという神一条の心定めと、それに応えておつとめを実行なさった人々の成人した姿を御満足されたのです。

先人方は教祖の仰せに従っておつとめを勤められましたが、教祖は現身を隠されました。なぜでしょうか。

もし教祖がそのままおられたらどうでしょう。おそらく初代真柱様や人々は、この先も教祖の御身

を案じておつとめの実行を躊躇するはずで、姿ある限り十分におつとめはできないでしょう。そこで定命をお縮めになられて御姿を隠された。すなわち、子供たちが安心しておつとめが勤められるようにとの親心から御姿をお隠しあそばされたのです。つまり、おつとめは教祖の25年の御命そのものです。

また、人間思案を捨てておつとめを勤めることができたのだから、これからは独り立ちをして、神一条の道を通れるようにと、その成人を促される親心からでもありません。

こうした親心から、教祖は定命を縮めて御姿をお隠しなされました。これは「究極の親心」だと私は思います。

親というものは、子供が病気になるたときや危険な状態になれば、「私の命を○年削ってくださいって結構ですので、何卒この子の命をお助けください」と縋るものです。しかし、残りの寿命全てを引き換

えて、という心定めまではいかないものだと思います。ましてや、ようぼくや信者さん、つまり理の子の成人を促すために、我が命を引き取ってもらうような心定めなどできるものではありません。

これを思えば、後に続く人々が安心して神一条、つとめ一条の道を歩めるように、定命を25年お縮めくださった親心は、私には究極の親心であると思えてなりません。

### 存命の理はおさづけに

教祖は御姿を隠されてからは存命の理をもってお働きくださるようになりました。それまではお道の前面に立つてくださったいた教祖は、陰に回り、目に見えない存命の理として、世界たすけの先頭にお立ちくださるようになったのであります。

この御存命の理の世界は今も続いており、これから先も悠久に続いていくのであります。この存命の理のお働きはおさづけの取り次ぎに現れます。御姿を隠された直

後に飯降先生を通して、

さあ、これまで子供にやりたいものもあつた。なれども、ようやらなんだ。又々これから先だん／＼に理が渡そう。

明治20年2月18日

と仰せられ、広くおさづけの理をお渡しくださるようになりました。おさづけの上に頂戴する不思議なたすけは、どこまでも教祖の存命の理のお働きの賜物であり、たすけ一条の親心の現れです。先人方はおさづけの上に現れる御守護を通して、「教祖は本当に御存命でお働きくださっている」と確信して、たすけ一条の道を進む勇氣を得たのです。

### 親心にお応えする道

教祖が現身を隠された元一日は、ひながたの道が完結した日であり、それはまた、存命の理として新たなたすけの世界への扉を開かれた元一日でもあります。

教祖が難難苦勞の道を歩んでくださったのは、一れつ可愛い子供



をたすけたい、陽気ぐらしへ導いてやりたいという親心に他なりません。教祖のひながたには、この親心が一貫して流れているのです。そのひながたの道は、定命をお締めになってまで、子供の成人を促してくださった親心で締めくくられているのです。

更には、この親心は存命の教祖の親心として、今も私たちをお守りください、これから先も守り続けてくださるのです。

この教祖の親心にお応えするために、全教が同じ旬に一手一つになって成人の歩みを進めさせていただくのが、教祖年祭への歩みです。ここに教祖年祭を勤める意義があるのです。

教祖の親心にお応えする道は幾筋もありますが、その第一は、教祖が御自身の定命と引き換えてまでお急き込みくださったおつとめの勤修です。世界たすけの根本がかぐらづとめであり、その理を受けて勤めるのが各々の教会の月次祭です。

「その日が来たから」「やらなければならぬから」といった消極的な気持ちは捨てて、「このおつとめで確かな御守護が頂けるのだ」と腹の底から信じて、親神様の親心にもたれきって、周囲の人々、世界の人々のたすかりと、世の治まりを真剣に祈念して、一手一つに勇んで勤めるのがおつとめです。

おたすけにかかる際のお願いづとももしかり。「これで必ずたすけの理を戴けるのだ」と確信して、真剣に勤めさせていただくのです。そして、親心にお応えする第二は、教祖が御姿を隠されてから人にお渡しくださったおさづけの取り次ぎです。

おさづけは人だすけの宝であり、おさづけの上に存命の理を現わしてくださるのです。教祖のお導きの元で、機を逃さず、病み苦しむ人の御守護を真剣に願って、人をたすける真実の心をもってお取り次ぎをさせていただくのです。

おさづけは、おつとめの理を取り次がせていただくものですから、

たすけの根本はおつとめなのです。おつとめで世界のいんねんを切っていただき、おさづけの取り次ぎで個々のいんねんを切っていただきのです。

おつとめとおさづけによって、私たちを陽気ぐらしへと導いてくださるのです。

### つとめとさづけを芯に

年が明ければ年祭活動が始まりますが、その実動はおたすけが芯になるでしょう。おたすけと申しても、具体的な取り組みはさまざまあると思います。しかし、信仰者として心しなければならぬことは、私たちは奉仕団体や倫理集団ではなく、あくまでも親神様の教えを信奉する信仰者の集まりだということなのです。

つまり、おたすけの芯はつとめとさづけであって、これを疎かにしては、おたすけは成り立ちませんし、陽気ぐらしへの御守護は覚束ない。おたすけはつとめとさづけが根本であって、その上に

さまざまな取り組みがある、という順序をしっかりと心に置かせていただきたいものです。

教祖がおつけくださったたすけ一条の二本の柱が、つとめとさづけです。教祖年祭を目指す三年千日は、このたすけ一条の基本中の基本に立ち返る句でありましょう。

10月26日、ご本部秋季大祭では真柱様が直々に論達をご発布くださいます。これを重き理として、銘々がしつかりと受けさせていただきたいと思えます。そして、論達に込められた真柱様の思いに皆が心を揃えて、教祖にお喜びいただける心の成人と、一手一つの勇んだ実動を固く心に定めて、年祭活動を迎えさせていただきたいと存じます。

まずは今年一年をしつかりとつとめて、心も新たに三年千日に臨ませていただきますよう。

(要旨)

立教百八十五年 秋季大祭祭文

これの神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教荻津大教会長 井筒梅夫、慎んで申し上げます。

親神様には、神人和楽の陽氣世界を楽しみに、この世人間をご創造下され、約束の年限の到来により、教祖をやしるにこの世の表に現れ給い、元のちばをはじめよろづいさいの真実をお説き下され、世界たすけの御教えをお啓き下さいました。爾来、尽きせぬ御守護のまに／＼、陽氣ぐらしへと導き下さいます親心の程は、誠に有難く勿体無い極みでございます。私共は、届かぬながらも、報恩感謝の心で、御教えの実践に日々励ませて頂いておりますが、その中にもこの月の二十六日は立教の元一日を祈念して、御本部にて秋季大祭をお勤め下さいますので、当大教会にてもその尊き理を頂戴して、只今よりおつとめのお役にあずかる者一同、心一つに座りづとめ、陽氣てをどりを勇んで勤めて、秋の大祭を執り行わせて頂きます。御前には荻津の道の子が今日を大切な一日と参り集い、日頃賜る御恵みに御礼申し上げ、立教の元一日に思いを致して、相共につとめに勇み睦む状を御照覧下さいまして、親神様にもお勇み下さいますよう御願い申し上げます。

さて御本部秋の大祭において、真柱様より諭達をご発布頂きます。教祖百四十年祭を目指して、全教が一手一つの歩みを踏み出す旬に当たって、私共をはじめ荻津に繋がる教会長、ようぼくは、諭達の精神に一手に心を結んで、本腰を入れてたすけ一条に働かせて頂く覚悟でございます。そして、世界一つをたすけたいとの、元一日の深き思召にお応えできるよう、教祖の道具衆たる自覚と喜びを胸に湛えて、成人の足取りを心勇んで進ませて頂く決心でございます。教祖百四十年祭に向かう歩みには、至らぬ点や届かぬところもあらうかと存じますが、何卒親神様には厚きお慈悲にお抱え頂きまして、ならん中、尽くす真実には大いなる御守護を賜り、銘々は時旬に相応しい成人を果たし、各々の教会はたすけの理の吹く御守護を頂きまして、陽氣ぐらし世界への更に伸び行く道をお連れ通り下さいますよう、一同と共に慎んで御願い申し上げます。

秋季大祭 祭典役割

祭主	大教会長	指図方	瀧本眞二郎	守田清一	献饌長
扨者	瀧本庄司	賛者	川畑澄博	賛者	浜田宣郎
扨者	座りづとめ	前	井筒文夫	吉田裕和	岡本久昭
てをどり	湯川正岡	望月恵美	新居里実	山田淳子	木村理恵
会	会長夫人	岩切孝子	松本さだえ	奥田正儀	吉田裕樹
前	前会長夫人	奥田富美子	奥田眞治	岩切正教	奥田眞治
地	奥田正徳	加世田洋	立花善文	河端芳雄	奥田正儀
方	奥田眞治	立花善文	河端芳雄	奥田眞治	奥田眞治
笛	守田清一	木村眞次	中村俊和	梶川芳征	川畑正博
ちゃんぽん	岡島秀男	梶川隆一	今川聖一	村田光伸	湯川正信
拍子木	今川政治	井筒敏成	立花善三	西本義之	岩切治代
太鼓	井筒敏成	立花善三	西本義之	岩切治代	岩切治代
すりがね	山本義範	岩切正義	湯川正信	湯川正信	湯川正信
小鼓	竹内義忠	岩切正義	湯川正信	湯川正信	湯川正信
三味線	井筒ちぐさ	河合遊喜恵	吉田幸子	宗我邦代	西本美智恵
胡弓	岡島きよの	宗我邦代	西本美智恵	西本美智恵	西本美智恵

在籍者一同



## 喜びの奉告祭

### 七代会長就任奉告祭

#### 吉野川分教会

吉野川分教会（徳島県美馬市）

は、10月30日、大教会長夫妻、敏成さんをお迎えして、宗我道明七代会長就任奉告祭を執り行った。

記念撮影の後、午前10時30分、宗我会長の祭文奏上に引き続き、大教会長が挨拶。

「吉野川に繋がる方々には、それぞれの持ち場や立場、徳分を活かして、新しい会長を芯に心を揃えて、一手一つになって陽気ぐらしの手本となる教会を目指してもらいたい」と奮起を促された。そして、宗我邦代前会長に対して「五代会長の突然の出直しの後、会長として、また母として女手一つで21年間立派に勤め切られた」と長年の労をねぎらわれた。

### 井筒敏成さん

青年会本部委員・ひのきしん隊副班長に任命されました

立教185年10月27日



一手一つに陽気におつとめを勤め終え、御礼の挨拶に立った宗我会長は、「来年から始まる教祖百四十年祭の年祭活動には、親の声を頼りに、精いっぱい勤めさせていただきます」と決意を述べた。

その後、一同を代表して宗我会長から前会長へ花束を贈呈し、参

拝者一同の大きな拍手をもって長年の功績を称えた。

昼食を挟んで、福引抽選会が行われ、趣向を凝らした福引きに、会場は笑顔が絶えなかった。

参拝者は80名であった。

### 第2回芦津学生会総会

10月16日、芦津学生会は大教会で第2回総会を開催。高校生18名、大学生・専門学校生17名の計35名が参加した。

3年ぶりの開催となった今回は、学生会として初めておつとめ衣を着けておつとめを勤めようと、毎月の参拝デーに合わせ、おつとめ練習を積み重ねた。

午前10時より、武波直輝委員長が祭文を奏上。1年間の活動のお礼とより活発な活動をお誓いした。3交代でおつとめを勤めた後、式典。初めに井筒文夫・大教会役員が祝辞。「同じ年代の方に、尽くす喜びや信仰の喜びを伝えてほしい」と期待を述べた。続いて武波



委員長が「感謝の気持ちをもって、これからも笑顔の溢れる学生会を目指して努力したい」と述べた。そして木村里香次期委員長が、毎月の参拝デーと「春の学生おぢばがえり」への参加を呼び掛けた。

午後からは陽気ホールでアトラクション。お絵描きリレーやジュスチャーゲームなどで楽しんだ後、福引大会。各会から提供された豪華な景品が当たると大きな歓声が上がった。

登 用

【准役員】

瀧本 亘  
梶川 和人

立教185年10月23日

教務部報

教会長資格検定合格

白髪 大典（菅真勇）

立教185年10月17日教会長資格  
検定講習会第125回を修了し、  
翌18日検定合格されました。

教人登録

與 正人（名瀬港）  
與 相子（名瀬港）

立教185年10月6日

教人資格講習会第125回修了

高井 貞夫（大関門）

立教185年10月11日

修養科第974期修了

岩井 君代（晝 間）

立教185年10月27日

三日講習会Ⅱ修了

相場 照代（海部川）

福島 薫（周 宝）

立教185年10月6日

初席《9月》

（1名）直轄、菅玉、四ツ海  
（順序運びより 3名）

計 報

大教会准役員  
河合富祥氏

かわいとみよし



令和4年10月6日出直され  
た。86歳。

告別式は、10月12日大教会  
長斎主のもと、大教会陽気ホ  
ールで執り行われた。

氏は、昭和11年、父・辰巳  
和夫、母・愛子の二男として  
大阪市天王寺区に生まれ、34

年天理大学外国語学部イスパ  
ニア学科を卒業。33年おさづ  
けの理拝戴、41年修養科30期  
修了、同年教会長資格検定合  
格、44年教人登録、48年大教  
会准役員登用。

昭和44年3月に養子縁組し、  
河合遊喜恵と結婚。当時の沖  
縄分教会移転建築に際して、  
再三にわたってひのきしんに  
従事された。また史料部員、  
教務部員として永年大教会の

御用を務められ、本部修養科  
一期講師、教養掛主任なども  
務められた。

大教会准婦人

荳明徳分教会二代会長夫人

木村チヨ子姉

（きむらちよこ）



令和4年11月2日出直され  
た。90歳。

告別式は、11月5日奥田眞  
治大教会役員斎主のもと、京  
都市内の葬祭場で執り行われ  
た。

姉は、昭和7年、父・山田  
茂一郎、母ウノの二女として  
京都府愛宕群鞍馬村で生まれ、  
鞍馬高等小学校卒業。32年木  
村二郎氏と結婚、44年おさづ  
けの理拝戴、47年明隆布教所

開設、60年修養科第534期修了、  
平成3年大教会准婦人登用。

昭和61年から平成18年まで  
20年間にわたり、荳明徳分教  
会二代会長夫人として会長を  
陰で支えられ、ようばく、信  
者の丹精に尽力された。また  
親への孝心に徹し切られ、昭  
和47年より、毎月教祖の元へ  
手作りの和菓子をお献じされ  
た。

月例統計（自令和4年1月1日～至令和4年9月30日）

項 目	初	の	修	教
名 称	席	お	養	人
( ) 内教会数		理	科	
		さ	修	
		づ	了	
		戴		
大 教 会	(1)	10	10	
鞆	(13)	2	1	
東 津	(23)	2	2	1
吉 野 川	(29)	2	2	1
島 原	(16)	6	1	2
日 方	(15)	3		1
稗 島	(7)	2	1	2
本 津	(2)			1
日 高	(2)			
始 良	(5)			
津 和	(12)		1	
門 司	(6)	1	1	
當 別	(6)	1		
大 島	(26)	3	1	2
沖 縄	(3)		1	3
尼 崎	(2)	1		
四 ツ 山	(5)	4	1	
大 冠	(2)			
島 下	(1)			
天 保	(3)		1	1
青 山	(1)			
芦 浪	(1)		1	
甲 邊	(1)	1		
芦 華	(1)			
天 津	(1)			
入 江	(1)			
豊 野	(1)	1		
紀 周	(3)	1	3	1
勝 明	(1)			
神 の 島	(1)			
兵 庫 眞 洲	(1)		2	
芦 ノ 郷	(2)	1		
本 明 勇	(2)			
明 道	(1)			
芦 東	(1)			
和 鎮	(3)	2		
神 滝 本 徳	(1)			
芦 明 彰	(1)	1		
眞 明 彰	(2)			
本 氣	(2)			
芦 明 照	(1)			
眞 伯	(1)			
合 計 (209)	44	29	11	5